

本田財団レポート No.131

「21世紀における東アジアと日本のリーダーシップ」

韓国ソウル大学国際大学院副教授

朴 喆 熙 (パク チョルヒ)

財団法人 本田財団

講師略歴

朴 喆 熙 (パク チョルヒ)

韓国ソウル大学国際大学院副教授
財団法人世界平和研究所客員研究員



《略 歴》

- 1963年 韓国忠州生まれ
- 1986年 ソウル大学政治学科卒業
- 1988年 ソウル大学大学院政治学修士課程修了
- 1995年 財団法人世界平和研究所客員研究員
- 1998年 米国コロンビア大学大学院政治学科博士課程修了
- 1999年 日本政策研究大学院大学助教授
- 2002年 韓国外交安保研究院助教授
- 2004年 ソウル大学日本研究所運営委員兼学術交流部長
- 2004年 ソウル大学国際大学院助教授
- 2006年 ソウル大学国際大学院副教授

《社会活動》

- 2002年から 日韓フォーラム運営委員兼メンバー
- 2006年から 日韓政策対話メンバー、韓国政治学会理事
- 2006年から 現代日本学会理事、韓国国際交流財団政策事業諮問委員
- 2007年から ソウル市南北交流協力委員会諮問委員
- 2008年から 国会外交通商統一委員会政策諮問委員、外交通商部諮問委員
- 2008年から 朝日アジアフェロー、異和フォーラム代表幹事
- 2009年から 日韓議員連盟諮問委員、統一部政策諮問委員

《主な受賞歴》

- 2005年 第1回中曽根賞受賞

《主な著書》

- 1997年 「政界再編の研究」 有斐閣
- 2000年 「代議士のつくられ方」 文春新書
- 2001年 「21世紀日本の国家戦略」 訳著 (リリ) 人間サラン
- 2004年 「ゆれる日本の政党政治」 訳著 (リリ) Hanul 発行所
- 2006年 「日本のミドルパワー外交」 訳著 (リリ) オルムほか多数

このレポートは平成21年10月6日東京會館において行われた第112回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりましたパクと申します。私は本田財団の評議員をさせていただいていますが、あまり本田財団に貢献していないので、今日はちゃんと話せという命令がまいりまして、一つの貢献はできるかなと思いながらまいりました。本田財団としては珍しく、題目が非常に大きくて生々しい。東アジアと日本のリーダーシップに関する話になれば、多分こちらにいらっしゃる皆さんに私をご指導いただいた方が良いでしょうかもしれませんが、私が考えているものを生々しくお話しして、また皆さんのご指導をいただくという形にしたいと思います。

私は以前、政策研究大学院大学で助教授をしておりましたが、その時、吉村学長にも非常にお世話になりました。今は世界平和研究所で客員研究員をしておりますが、本日は、平和研の理事長の大河原大使もお見えになっており、私がここで話して良いのかという感じで、非常に恐縮でございます。

今日の話の題は「21 世紀の東アジアと日本のリーダーシップ」です。今日皆様にお話ししたいところは、東アジア、とくに韓国から日本のリーダーシップはどのように見えたのか。どのような背景でそのように映ったのか。今現在の日本のリーダーシップはどのように映っているのか。今からの日本のリーダーシップはどのようになるべきなのか。最後に日韓はどうすべきかというところをお話ししたいと思います。

アメリカから見た日本、アジアから見た日本

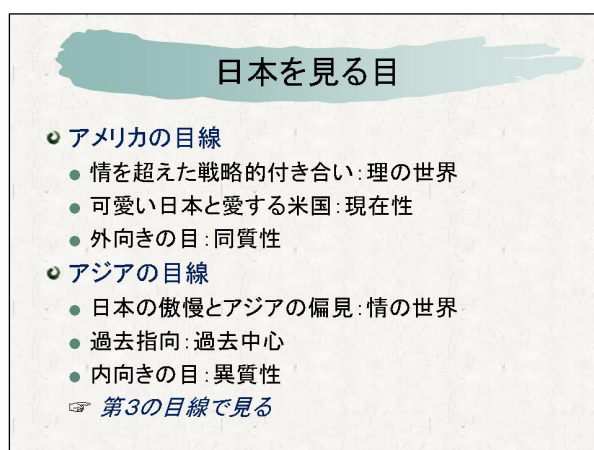


図-1

〈図-1〉 まず私の立場をはっきりした方が良いでしょう。私はアメリカのコロンビア大学で勉強しました。私の指導教授は日本でも有名なジェラルド・カーティスですが、日本を見る目はアメリカの目線とアジアの目線では少し違うと感じております。というのは、アメリカの方は、日本を戦略的な目で見るとは違って、一つの国だけを見るのではなくて世界の目線から、また、地域の力学の中で、日本をどのように扱うかということになると、当然戦略的に日本を扱って、日本と戦略的なパートナーシップをちゃんと組む。

その目線からは、経済成長してアメリカのパートナーになっている日本は可愛いくて、非常に付き合いやすい国になっている。だからエズラ・ヴォーゲルさんが『ジャパン・アズ・ナンバーワン』を書いたりしている。多分、アジアの国で『ジャパン・アズ・ナンバーワン』という本を書ける人はあまりいないと思います。また、アメリカの目線から強調するのは、日本とアメリカの同質性で

す。同じ価値観、同じ体制、同じ利害。このことを考えて、あまり違うことを強調しない。

アメリカの目から見る日本はそうなのですが、アジアからは日本は違う目線で見られる。ちょっと良くないかもしれませんが、情の世界に入って、好き嫌いが出て、アジアの偏見が出る。被害者意識を持って日本を見てしまう。それに対して日本も、若干傲慢なところも残っている。いろいろな軋轢がまだ残っているところもある。

その目線は過去を中心に、歴史をどう扱うかというところに行ってしまう、過去の歴史問題をすんなりと乗り越えていない。日本とアジアの国の違うところがいつも目の前に見えて、日本が右傾化するとか、軍国主義化しているとか、軍事大国化しているとか、そのような話ばかり出ているわけです。

ではあなたの立場はどうかと言われると、私は韓国で生まれて大学までいたのですが、長くアメリカで勉強して日本で勤めたこともある。日本の方にもいろいろお世話になっているので少し目線が違うところが生まれ、やや客観的でグローバルになっているかもしれません。そのような立場から今日お話をしたいと思います。

これまでの東アジアと日本との関係

東アジアの秩序の変遷

- 19世紀末:近代化の明暗
 - 中国の墜落、韓国の鎖国
 - 日本の近代化と上昇:脱亜入欧
- 20世紀前半:帝国主義、植民地、戦争
 - 日本の帝国主義
 - 大東亜共栄圏
- 20世紀後半:冷戦期
 - 日米韓の同盟と共産圏(ソ連、中国、北朝鮮)との対決
 - 日本主導のアジア開発
- 21世紀初め:地球化、多極化
 - アメリカ一極主義の揺れ:EUの結束と中国の浮上
 - 東アジアの時代(日・中; 日・中・韓; ASEAN)

図-2

東アジアから見る戦前の日本

- 西洋との争いの中の日本と東アジア
 - 脱亜入欧と帝国主義: 輕蔑の対象
 - 大東亜共栄圏?: 客体としてのアジア
- 大日本主義へ
 - 大国主義・覇権主義
 - 軍事拡大路線
- 単独・自主路線
 - 協調より自力解決と他国との対決
 - 日本中心の域内進出

図-3

〈図-2〉〈図-3〉 ご存じのように、東アジアと日本の付き合いが本格的に始まったのは 19 世紀の後半からで、今まで四つぐらいの段階があったのではないかと思います。一つはアヘン戦争のあと近代化に向いている日本に対して、落ちこぼれになっている中国と韓国。アジアは非常に付き合いにくいというか、貧しい。あまりきれいではない。汚い。開発のできていない国なので、日本はアジアの国と付き合うよりは欧米に向けて、脱亜入欧精神を持って西洋の仲間入りをしたいという精神でずっと行った。本当の意味で日本はさきがけとして、近代化してアジアを引っ張っていく立場にあったと思います。

20 世紀の初め頃になると、欧米の大国と一緒に帝国主義に走り、植民地や戦争を通じてアジアを支配する国になった。非常に強い大国としてアジアを支配する国になったと思います。大東亜共栄圏という概念を作っているいろいろやりましたが、私はそれが大東亜か大日本か、本当に共栄か日本の繁栄か分からないところもあります。戦争が終わるまでのアジアとの付き合いは、アジアから見るとそんなに面白くない付き合いだったと、私は率直に思っています。

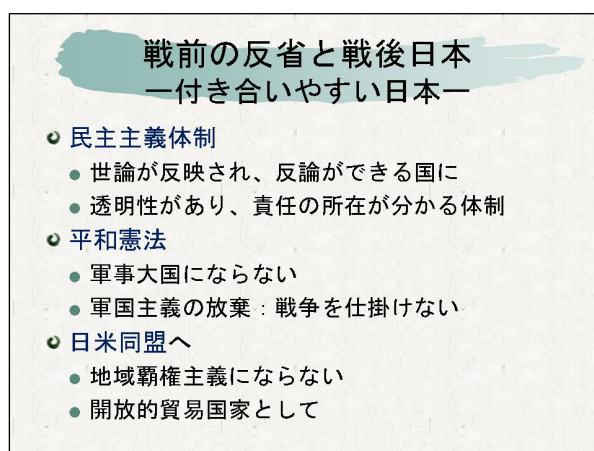
しかし戦後になると、冷戦期になる。特に韓国が目から見ると、日米間の同盟が作られ、共産主義との戦いの中で日本を見ることになりましたので、その面では非常に安心感を持たれる国になった。また経済の面でも日本が主導して、いわゆる Flying Geese Model ですね。日本がいちばん先に走って、そのあとシンガポール、韓国、台湾、香港のような国が続き、そのあと東南アジアのほかの国が続いていく。そのような形で、日本は経済面で非常にアジアを引っ張って行くリーダーシップを果たしていた。その面では、この時代はアジアの国や韓国から見ると、非常に付き合いやすい日本だったと思います。

それが 90 年代を超えて、後でお話しますが、90 年代以後今に至るまでは、アジアの方から見ると日本とどう付き合うか、日本もアジアとどう付き合うかを非常に悩んだ時期だったと私は思います。

アヘン戦争以後今までは、やはり日本の世紀だったと思います。約 150 年ぐらいは良い悪いは別として、ずっと日本が単独でリーダーシップをとっている時期でしたが、今は中国が急ピッチで浮上し、アジアの中で中国と日本が競争したり共存したりし、そこにはさまれている韓国は非常に息苦しいところがある。それをどうするかということも、後で話したいと思います。

しかし経済面を見ても、全体的にはこの頃は東アジアの時代に本当になっている。GDP とか生産、いろいろ見ても、全体的には東アジアが発展の中心になっていて、ダイナミックな時代になった。非常に面白い時になったと思います。

アジアと日本との関係変化の背景



図－４

〈図－４〉 戦前の話はあまりしたくないのですが、その頃の東アジアから見た日本は、非常に付き合いにくい国だったと思います。日本の目が、まずアジアは支配の対象。お互い主体ではなくて、客体としてのアジアになっていて、西洋の列強と並ぶ国になるために、非常に頑張ったんですね。大日本主義の影響の下で、覇権主義、軍国主義というところに非常に走っていった。ほかの国との協力路線よりは自主独立路線でいったので、韓国も非常につらい経験もいろいろしました。その面から日本というのは、ある面では憧れはあったかもしれませんが、非常に付き合いにくかったと思います。

しかしこの後、戦後の日本は変わった。これは多分韓国やアジアの中であまり理解されていない

日本だと思うのですが、戦前の日本に対する反省の上に立っているのが戦後の日本であり、それが日本を実際にはアジアの国と付き合いやすい国にしたと私は思います。

何よりも体制が民主主義体制になっている。今回政権交代があつて、やっと政権交代が可能な本当の民主主義になったという話もありますが、しかし前から日本は民主主義の国であつた。民主主義だから何が何でも満足できる体制ではないのですが、私が民主主義を愛する理由は、やはり世論が反映されるからです。時間は5年も10年もかかるかもしれませんが、長い目で見ると世論が反映される体制であり、反発もできる。「私はあなたのところが嫌いです」とか「私は好きではない」ということを自由に話せる体制です。そのような体制はやはり良いものです。

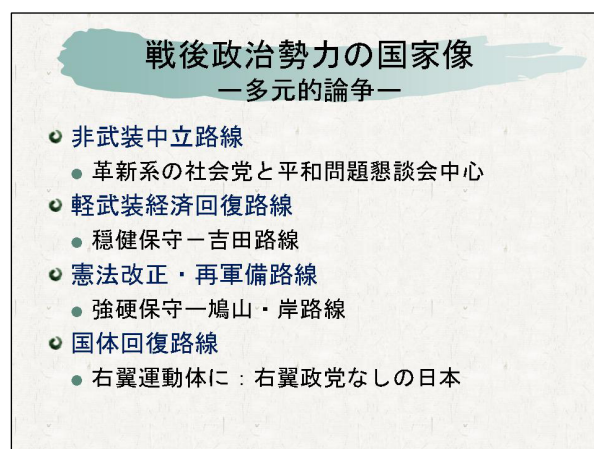
また政策決定過程の透明性もあるし、誰が責任をとっているかも良く分かる。それがあいまいになっている体制とははっきり違うところがあります。日本はそのような国になって、分かりやすくなったというところと、平和憲法。

憲法の問題はいろいろ議論がありますが、平和憲法を持って軍事大国には走らない。防衛にしても、専守防衛にして攻撃はしない。自衛のために自衛隊を持つ。そのようなことは、隣の国から見ると安心感を持たせる材料になっている。憲法9条で見られるように、戦争は放棄する。多分憲法改正をしても、9条の1という最初の部分は残るのではないかという期待もあります。そのところが戦前の日本とは一線を引いた、違う日本だということが分かるようになった。

日米同盟。戦前の自主独立路線は他のところに頼らず、協調路線ではなかったのが、アメリカとははっきりと手を組んで、地域覇権主義には走らない。アメリカとの付き合いの中で見ているから、逆にアメリカを信頼すれば日本も信頼できるというところもある。そのような面で、安全保障の面でも経済の面でも、非常に安心できる国になっている。

貿易国家として非常に成長しているところは、逆にゼロサムゲームではないので、貿易とか通商というのはお互いに利益を分け合うことなので、脅威でも何でもない。その面から、戦後の日本は付き合いやすい日本になっていると思います。多分このことがはっきりとアジアの国々の人々に知られていない。分かってもらえていないから、非常に日本は苦しいのではないかと思います。

多元主義的な日本



図—5

〈図—5〉 私は、日本は多元主義的な国だと思います。一つの路線だけが走って他の意見がない

という一枚岩のような国には見えないし、だから逆に日本の方がダイナミックだし面白いと思います。戦後の論争を見ても大きな論争があって、その一つの妥協点というか中間路線として吉田路線があり、そのあと冷戦が終わってまた論争が起きて、今に来ているという感じがします。

戦争直後の国家の戦略というか国家路線を見ると、皆さんご存じのように社会党革新系は非武装中立路線に集中し、丸山真男先生を非常に尊敬して、平和問題懇談会を中心としてそのような路線が定着したわけです。日本という国は非常に特殊な国で、ユニークな経験がある国なので、それを大事にしながら戦前の反省の上で非武装中立に走るべきだという考え方。ここに元社会党の方がいらっしゃるかもしれないけれども、15年ぐらい前でも社会党で丸山真男をバイブルのように読んでいる方が何人もいた。

非武装中立路線の反対側には強硬保守路線もあり、鳩山一郎さんとか岸信介さんのように憲法改正をきちんとやって自主憲法を作るべきだ、再軍備もやるべきだというところもあったわけです。日本で非常に政治的に面白いのは、戦後右翼が政党を作らなかったところだと思います。右翼団体は存在し運動体として残っていて、国体運動を今もずっと続けているのですが、それは政党にはなっていない。

右翼は社会勢力としては残っているのです。私は昔ロシア大使館の前で一つ部屋を借りて研究していた時期があるのですが、毎日のように右翼の車が来て、わいわいいろいろしゃべっているんですね。メニューが足りなくて、いつも「北方領土を返せ」と「天皇陛下万歳」の二つしかないので、ちょっとメニューを変えて下さいと言いたかったです。しかしそれは運動体であって政党ではなかったというところが、政治体制の下では非常に面白いところだったと思います。それが政党になっていたら、またぜんぜん違う日本になっていたかもしれない。

吉田路線

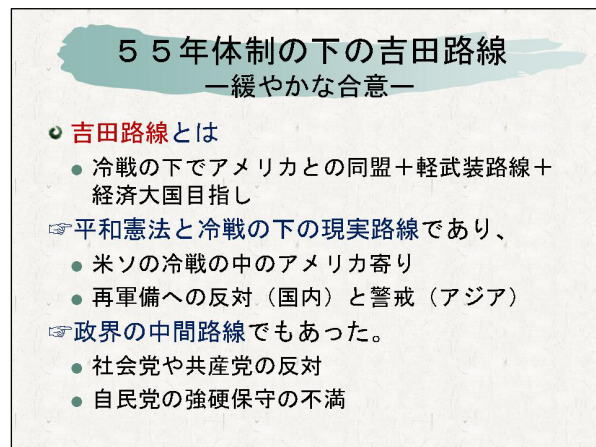


図-6

〈図-6〉 そのような勢力の中で、穏健保守として経済回復路線、いわゆる吉田路線が、どちらかという非常に緩やかな合意体として存在した。吉田路線というのは簡単に要約すると、冷戦の下でアメリカと手を組んで同盟を組み、重武装をしないで軽武装をする。日本は自力で期間限定の侵略に耐えられるぐらいの武装はしない。その代わり経済大国として回復して成長したい。ある種の安全保障の面での小日本主義と、経済面での大日本主義が混ざったような国家戦略だと私は理

解しています。

私が思うには、これは冷戦の時の非常に現実路線だったのではないか。世界で一番強い国であるアメリカと手を組んで同盟を結び、アメリカに安保を任せる。その代わり日本は経済回復に集中して、経済大国として世界に戻りたいという夢が、そのまま実現するようになったし、何よりも政治的に再軍備をすることに対しての警戒心、躊躇というか遠慮が対外だけではなく国内でもあったので、そこにも配慮する。

アジアにも軍国主義に戻るのではないかという警戒が残っているので、その真ん中をとって行っているような非常に現実路線であった。政界の状況を見ても、社会党は現実的ではない非武装中立を言っても、あまりにも理想主義に走っているのですこまではいけない。しかし急先鋒で強硬路線の保守まで行ってしまったら、またアジアの国の反対とか国内で反発を受けるかもしれないので、その真ん中を中間路線で行ったのが吉田路線ではなかったかと私は思います。このようなことで、アジアにしてみれば非常に付き合いやすい日本になったと思います。

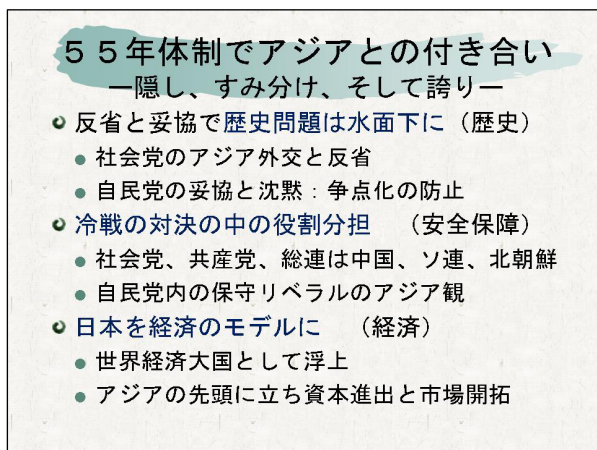


図-7

〈図-7〉 付き合いやすい日本にはいくつかの次元があります。今は歴史問題が前面に出ていますが、歴史問題はある程度水面下に隠した。わざわざ誰かが意図を持って隠したわけではなくて、歴史問題が前面に出るのはあまり望ましくない。それを直接見せているのが社会党を中心とした反戦主義。いろいろな護憲主義を前面に出し、反戦の姿勢もはっきり見せ、また日韓の基本条約に見られるようにある程度は妥協して、強気を出さなくてある程度抑えるという力学があったと思います。そのようなところがあったので、少なくとも歴史の問題がお互い、アジアの国との争点化に発展するのを抑える力学があったのではないかと思います。

それと、アジアの国との包括的な付き合いが実際はできたと私は思います。自民党の保守のメインストリームはアメリカとの付き合いを非常に大事にしていたのですが、良く見たらいろいろな勢力がぜんぜん違う付き合いをしていた。まさに役割分担をしているように、社会党は中国と、共産党はソ連とも付き合う。朝鮮総連が北朝鮮と付き合うのはあまり止めない。だからいろいろな情報や交流ネットワークが作られるような状態になった。

また自民党の中、保守の中でも保守リベラルの方は、それを全部支えるというか、許すという立場で、非常に円満な付き合い方。どこかを切って付き合わないということはなかった。冷戦が両極

化しているにもかかわらず、いろいろなところと付き合ったというところがある。

その反面、経済面では経済大国として上がった。それはモデルとしてアジアから全部受け止めることになっているので、それをフルに活用して、資本も進出したりいろいろな資本の支援をしたり、技術を移したり、新しい支所を開拓したりと、いろいろな役割を果たしました。ODA とかもいろいろな国に提供しました。アジアから見ると、このような日本のリーダーシップは決して悪いことではなかったというのが、現実ではなかったかと思います。

資本の進出を見ると、多分韓国とは資本と技術の提携は非常に上手く行ったと思います。例えば今韓国の李明博大統領の兄貴はコーロンという会社に勤めていて、彼は提携していたこちらの会社の第1期目の研修生として日本に来ていた方です。そのように60年代半ばぐらいから、すでに付き合いが深くなっているわけです。この戦略で日本は成功したと私は思います。まず経済的に世界大国になり、ナンバー2の経済大国になっている。

普通の国

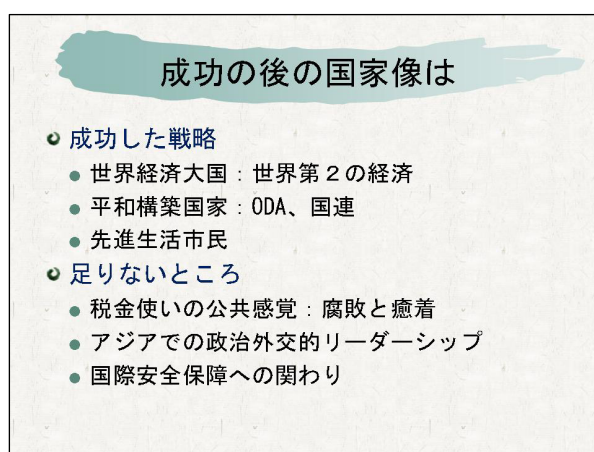


図-8

〈図-8〉 日本が普通の国か普通の国でないか、などと言う様々な議論があります。私は日本の学者とアメリカの学者と共に、ノーマルカントリープロジェクトというのをやって、何年間もずっと議論したことがあります。安全保障の面で見たら少しノーマルでないところがあるかもしれませんが、ほかのところはノーマル過ぎる。あまりにも上手くやってしまい、それが問題だったという議論になっていたことがあります。

ODA や国連への関与等を見ると、日本は普通すぎるぐらい平和国家として成功した例で、結局失敗した国ではないのです。一般市民の生活を見ても、もちろん今は今回の選挙で見るように年金、保険、子育てといろいろ不満はいっぱいあるのですが、世界の基準で見ると日本のように良い国はない。全国民に国民保険に加入してもらい、年金もしっかりしている。貯蓄もあって、子育てもいい。韓国人の目から見ると、日本のような立派な保育園施設を韓国ももう少し増やして欲しいと思います。

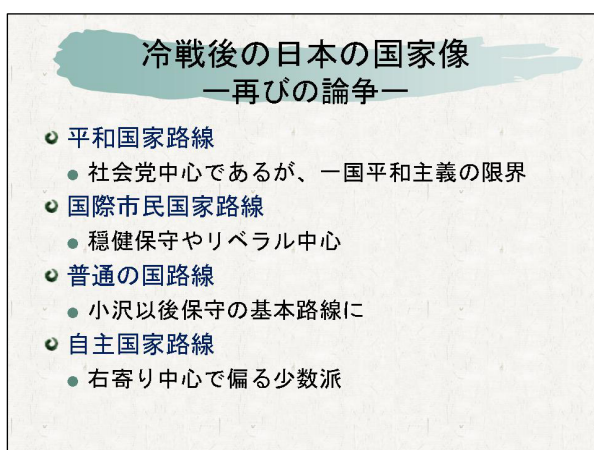
そのように世界的に見ると、日本は憧れる、非常に生活しやすい国だと思います。これは日本が誇りを持つべきところです。もちろんもっと頑張りたいのは分かりますが、世界的に見るとこのように成功した国は珍しいのではないかと思います。

今のアメリカのオバマ大統領が医療保険改革をしようとしても、お金がないとしょうがないとか、自由にやるべきだという訳の分からないことで反発している人もいます。それは日本の基準から見るととんでもない話であって、社会福祉の面から見ると、日本が世界のモデルになってもいいのではないかと思います。

そのような中で日本が少し足りなかったのは、自民党の政権が長く続いたからかもしれませんが、腐敗と癒着ですね。お金の流れが透明ではないところがある。そこを今回民主党政権にどのように直してもらうかを、私も注意深く見ています。あるところで腐っているところがある。そこは直してもらいたいとも思っています。

アジアでの経済的なリーダーシップは持っているはずですが、政治外交的に本当にリーダーシップをとっているかというところ、物足りないところがある。後で申し上げますが、はっきり言うと歴史の負の遺産をまだ乗り越えていない。日本と韓国の中に、日本とアジアの国の中に歴史問題があると良く言われますが、それは違う。

歴史問題は日本の問題なのです。日本が乗り越える問題であって、外からいろいろ言ってもしょうがないところがあります。それは日本が独自で乗り越えて欲しいという話をしているのです。それをはっきり乗り越えていないから、逆にアジアでしっかりした政治外交的なリーダーシップをまだとれないというのが、私の感想です。



図－9

〈図－9〉 また国際安全保障へのかかわりは後で問題になって、それが普通の国につながるわけです。冷戦が終わり、湾岸戦争の経験があって、130 億ドルという大きな金を払っても国際社会であまり評価されない。一國平和主義とかチェックブック・ディプロマシーとか批判されるので、国際社会へのかかわりはもう少ししっかりして欲しいというのが、多分小沢さんが言い始めた普通の国の路線に発展したと思います。それをやるためには、もう少し政治が主導する。官僚任せではなく政治が主導して、もう少し保守的な両党が政権交代ができるような国にしたいというのが、簡単にいえば小沢さんの普通の国路線だったと思います。

しかし、普通の国路線が日本全体の合意で一気に走ったのではなく、いろいろな国家像が描かれている、違う考え方を持っている政治勢力と社会勢力が残っているわけです。もちろん社会党がどんどん弱めているように、昔のような平和国家路線は非常に弱まっているのですが、憲法を守って

平和主義で過ごしたいという勢力もまだ残っている。一国平和主義と批判されたように、その限界も感じるようになりました。

国際市民国家という言葉は、朝日新聞の主筆をやっている船橋さんが作った言葉かもしれませんが、穏健保守の方は国際社会で軍事的なことにはあまりかかわらない国際市民国家として普遍的価値のある日本を見たいという、そのような流れでしょう。

また、個人の名前を申し上げると怒られるかもしれませんが、石原都知事のように、もう少し自主的に防衛大国にしたいという主張では、核武装も辞さずにやりたい。非常に右寄りで、歴史問題はしっかり話をすべきだというような自主国家路線も存在している。これは決して日本のマジョリティではないと思いますが、そのような考え方を持っている方も当然存在するわけです。

私に言わせれば、小泉政権の後半からその後安倍さんのところで、普通の国から普通を超えているところまで、かなり踏み込んでしまったという感じがする。そこから自民党政治は少しおかしくなっているのではないかというのが、私の個人的な感想です。

冷戦後のアジアと日本

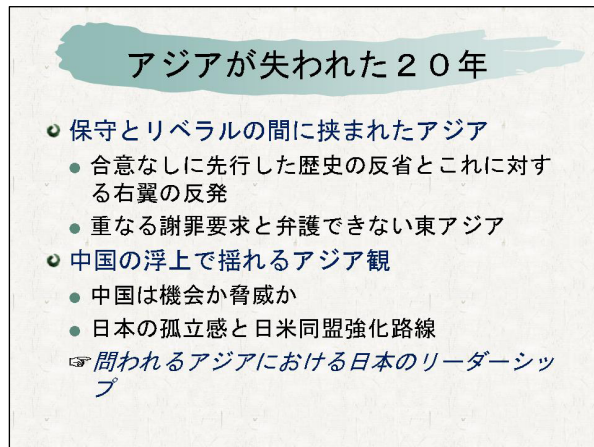


図-10

〈図-10〉 冷戦が終わった後から今までについてアジアから日本を見ると、アジアはどこかに失われてしまったのではないかと。いろいろな議論の対象になってしまって、まともにアジアを見ないし、そんなに面白くもないところが、アジアになっているのではないかという感じがいたします。

これは鶏と卵の関係かもしれませんが、日本の中でなんとなく保守とリベラルの間にアジアが挟まれて、十分な国内的な合意がないうちに、村山談話を出し、また戦争に対する国会決議も出す。また従軍慰安婦に対していろいろ措置を立て、それに反発する右寄りの声も強くなっている。

このリベラルと保守の両方の中の争いというか、喧嘩がかなり激しくなって、アジアが今一つ見えない、どうするか分からない状態になっている。そのうち日本とアジアをもっと付き合いにくくしたのは、韓国や中国からいつも言われるように、また「謝れ」「謝罪しなさい」という重なる要求がきて、「何んだ、何回謝罪すれば良いのか」という思いが日本に出てくる。

その前はずっとアジアを弁護してくれたリベラルとか、保守の中のリベラルまで、「そこまでは我々もついていけないから、もう良いよ」という感じになった。アジアは非常に難しいホットポテトになってしまった。これが、この20年ぐらいのアジアだったのではないかと思います。

それをもう少し複雑にしたのは、中国の浮上です。中国が急ピッチで大きくなっている。90年代半ばぐらいから中国は見え初め、見えるどころだけではなくてどんどん大きく見える。私にしてみれば中国の力をあまりにも過大評価しているのではないかと思います。中国の脅威とか、中国の伸びを非常に警戒しているように見えます。

学校にたとえて言えば、いつも2等とか3等の学生が自分を超えて1位になって、自分は勉強してもついていけないぐらいになっている。そのような感じで中国が見られている感じがします。中国が非常に脅威と見られる。だからどう付き合うか分からないところがある。

中国がどんどん大きくなるから日本はどうしたかという、アメリカとちゃんと手を組もう。日米同盟を強化せざるを得ない。ここに非常に一生懸命に走ったのが小泉政権だと思います。アジアを出て、アメリカとしっかりと手を組んでやりましょうというところで、私はこれを通米入亜路線と名づけましたが、アジアに入る時もアメリカを通じて入ろう。そうでないと安心できない。そのような状態になっていったのではないかと思います。

このような立場から見ると、アジアは何か怪しくて訳が分からなくて、非常に付き合いにくいところになってしまいうんですね。そうするとアジアから見た、日本はリーダーではない。そんなに懐がないのか、それを乗り越えてリーダーシップを取れないのかという形になってしまうので、アジアもいろいろ、両方とも満足できない状態が数年前まで続いたと私はみております。

現在の東アジア

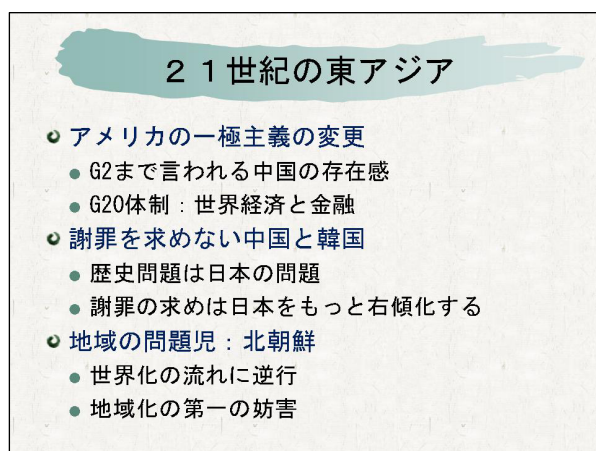


図-11

〈図-11〉 では今の東アジアはどうかというと、アメリカの一国主義は少し弱まっている。軍事的にはやはり強いのですが、経済面では自分も資本主義という誇りを持っていたところがすでに金融でやられて、金融危機が訪れる。そうなるので今はG8だけではなくて、G20で対応しようというように、昔と比べれば世界と取り組むやり方を少し変えている。

中国と韓国も非常に学習効果がありまして、ずっと「謝りなさい」と日本に言い続けたら逆効果で、右翼の方が喜んで、そちらの声がどんどん大きくなっている、それはやってはいけない。

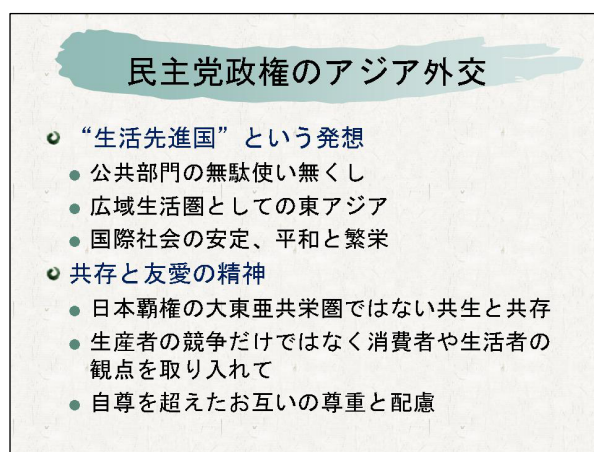
私は個人的な経験で、安倍さんの初めの訪韓を強く推奨し、それに初めの段階からかわり、「あなたは総理になったら中曽根総理のように韓国にまず行きなさい」と話しかけたことがあります。それは、「こちらからも刺激しないから、あなたのところでもあまり刺激的なことをしないで」と

いう前提があったわけです。その時非常に日本を知っている中国の方がまた胡錦濤にアドバイスしたのです。2人で会って話をし、なぜこんなに同じ考えだったのだろうと思ったことがあります。

もう謝罪は求めない方がいい。日本の方がちゃんと考えて対応するように励ました方が良いでしょう。この問題は韓国や中国から圧力をかけるものではないということに、考え方はかなり変わっています。この考え方の変化は日本でまだ良く理解されていないかもしれません。

この地域で問題児になっているのは北朝鮮なんですね。非常に失敗した国で、韓国側から見れば不良な兄弟のようなものが北にあって、非常に困っているわけです。この問題が上手く解決できない限り、東アジアを落ち着いて見ることは非常に難しい。北朝鮮の問題は人の問題ではなくて我々の本当の問題で、この問題を良く解決しない限り、東アジアということをはなかなか言いにくい状態なのが、今の東アジアだと思います。

日本外交の課題

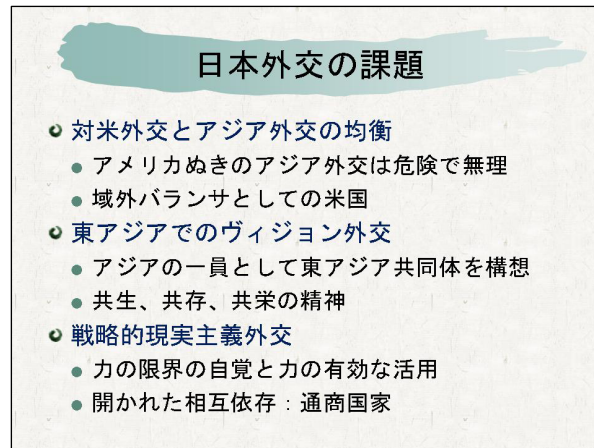


図－12

〈図－12〉 民主党政権になって私が非常に面白く見ているのは、生活先進国として日本を作りたいというねらいが見えるところです。生活をこのように強調した政権を私は見たことがありません。

『国民の生活が第一』というキャッチフレーズで見られるように、非常に生活を中心にする。消費者の観点、生活者の観点から政治を見ている。そのためにはやはり国際的に安定した環境が必要であるし、戦う世界というよりは共生、共存と友愛という言葉が鳩山さんの言葉です。激しく対立するよりは、物事を安定させた方が良いでしょう。

そこから東アジア外交ということが生まれたと思います。そのように一緒に共生、共存しながら、相手の立場と自分の立場を合わせながらやるというやり方に、非常に期待しているのですが本当にどうなるかは分かりません。



図－13

〈図－13〉 誰が政権をとっても、日本外交の課題はそんなに変わらないと思います。麻生政権であっても鳩山政権であっても、ほかの政権であっても、日本の外交課題はそんなに変わっていない感じがするのです。

一つは、アメリカとの関係を非常に大事にしながら、しかしアジアの国ともバランスをとり、バランスある均衡外交をしなければならない。アメリカを捨ててアジアに入ったり、アジアを捨ててアメリカに走ったりすることは、両方とも危ないゲームをやっているところで、両方とも上手いかなければならないところが日本の課題です。

もう一つは、日本がアジアの一員ということを忘れてはいけない。否定したくてもしょうがない。アジアの国なのです。だから東アジアの国としてのビジョンを持たないといけない。東アジアは大陸の方にあるもので、島国の日本はアジアではないような偏った感想で日本の外交を見たら、それは大間違いだと思う。どうしてもアジアの国なので、東アジアをどうするかというビジョンを持たなければならない。

もう一つは、非常に現実的な外交をしなければならない。それは、ある程度の力の限界を早く自覚することだと思います。日本を何でも大国にしたい、技術大国、文化大国、経済大国、軍事大国、全部揃っている大国にしようとしたら、多分無理があると思います。ある程度はどこかを抑えなければならない。そのようなところで現実外交をしなければならないし、国家としての立場は今からそんなに変わらないと思います。

日本と韓国のパートナーシップ

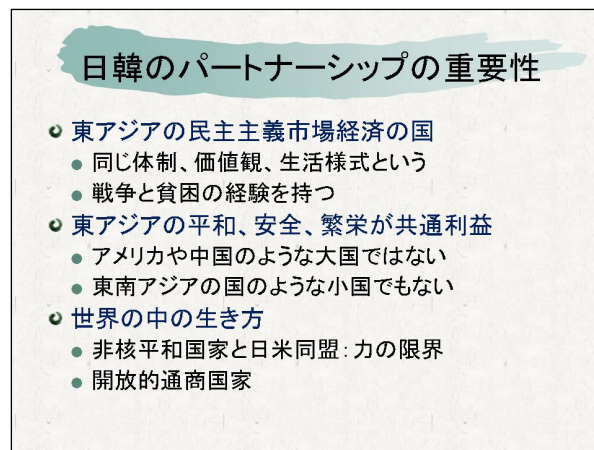


図-14

〈図-14〉 そうなると、日本と韓国のパートナーシップは非常に大事になってきます。と言うのは、東アジアの中で、本当の意味で民主主義、市場経済、法の支配、人権尊重をやっているところは他にはないのです。日本と韓国だけがしっかりとやっている。また、東アジアを平和に結びつけ、安全で繁栄するところにするにも共通利益を持っているわけです。北朝鮮の問題を含めてそのようなのです。

世界の中での生き方も、韓国もあまり核を持ちたくない。日本も非核の国として平和路線でいった方がよい。それで日米同盟をちゃんと結んだ方がお互いの利益になる。アメリカがいない韓国と日本は考えられない。考えたらお互いに非常に怪しい国になって、疑心暗鬼でどうなるか分からないような状態になるかもしれない。

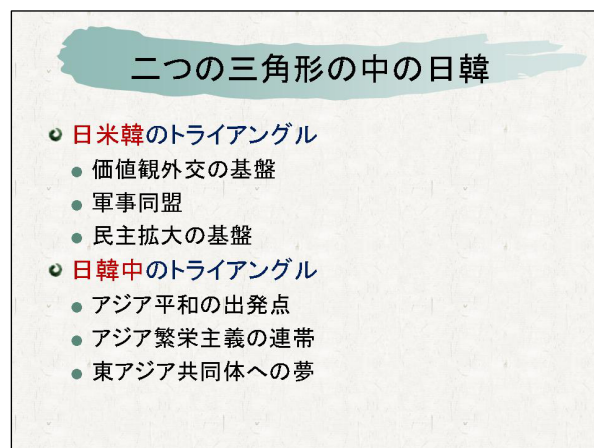


図-15

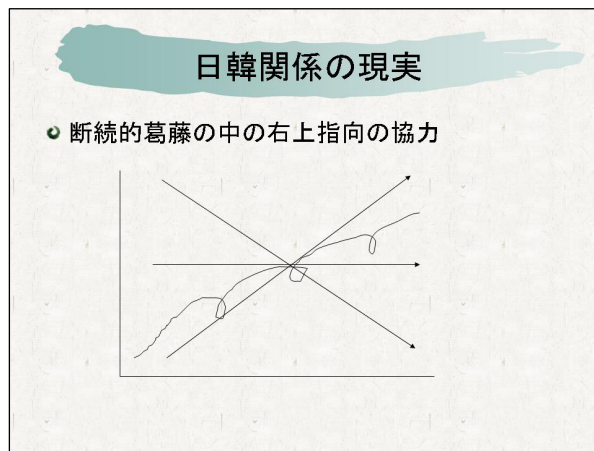
〈図-15〉 日本と韓国は非常に似た立場にあるのです。だから更に協力が進むべきだといつも強調しているのです。なぜ日本と韓国は協力しなければならないかというと、二つのトライアングルの中に共通に入っているからなのです。日米韓というのは、絶対我々が捨ててはいけない一つのトライアングルです。民主主義を一緒にやっている。軍事的な安全保障の面でも一緒にやっている。市場経済も一緒にやっている。民主主義をもう少し拡大するためにもこの連携は必要なもので、そ

のような日米韓のきちんとした連携を持たなければいけない。

しかしそれと同時に、日中韓のようなアジア共同体を夢見ながら、今からアジアの国として生きるためには、中国ともまた良い付き合いをしなければならない。そうみると、アジアの平和を、アジアの繁栄を作るためには、日中韓の三角形も非常に大事です。日米韓にも日中韓にも、両方とも日韓は入っているわけです。だからこの両国が戦略的にいろいろなことを考えながら物事を進めた方がお互いに得になる。損するものは何もないと私は思います。

では、韓国と日本は本当に協力できるのか。いろいろな問題を起こして大変ではないかと思っ
ているかもしれませんが、私の理論はこうです。日本の方は歴史問題以外にはあまり問題がない。歴史問題だけを除けば、日本と韓国のように協力できる国は世界の中でどこにもないと思います。多分、海外に行かれる経験が多い皆さんの中で、韓国の友だちと付き合ったことのない人は、ここには1人もいないのではと思います。そのくらい近いわけです。

やはり邪魔になるのは歴史問題ですが、日韓の間で歴史問題だけが関心事であつたら両国の関係は全く発展しなかったでしょう。逆に、歴史問題が何もなかったら、そのまま一直線で上向きの協力関係を作ったでしょう。また、歴史問題は本当に邪魔になって、これだけが問題になったら日韓関係はどんどん悪くなったと思います。しかし、このいずれも現実ではなかったわけです。本当の現実、は、少しずつ喧嘩をする。時どき喧嘩をするので、この時を見ると大変なんです。日本と韓国は付き合っていけないような感じに見えるかもしれませんが、長期的に見ると非常に関係は進んでいるわけです。



図－16

〈図－16〉 去年のデータで見ると、お互いに470万人ぐらいが往来しています。調べてみると、去年の上半期の段階で、1カ月に日本と韓国を結ぶ空港便が4192便です。お互いを結ぶ航空便が1日100便を超えるのです。非常に近い関係になっているし、多分韓流のドラマを1つもご覧にならなかった方は少ないと思います。

いろいろなことを見ても、全般的な関係は上がっているわけです。だからどこに目を置くか。歴史問題に目を置くと、「いやいや、難しい」と言うけれども、長期的に見ると非常に良くなっている感じがします。

今後の日韓のパートナーシップ

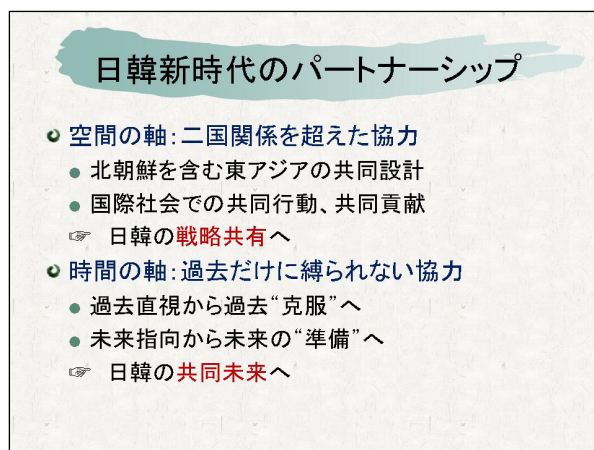


図-17

〈図-17〉 今からの新しいパートナーシップを作るには、時間の軸と空間の軸の両面で、両国関係をぜんぜん違うものにしなければならないと思います。空間の軸では、日本と韓国のバイラテラルだけでものを考えてはいけません。もう少し広い範囲で、2国間関係を越えるものとして、日本と韓国のパートナーシップを考えるべきです。

そこに当然、北朝鮮問題がいちばん先にくる。北朝鮮問題で日本と韓国は今からどうするか。お互いに悩みながら語り合わないといけません。また国際社会に向けて、どのような動きを一緒にするかを考えるべきですね。ODA も一緒にできるし、PKO も一緒にできる。いろいろなことが一緒にできるのです。企業の方もそうです。そのような2国間関係を越える戦略を共有すべきなのです。

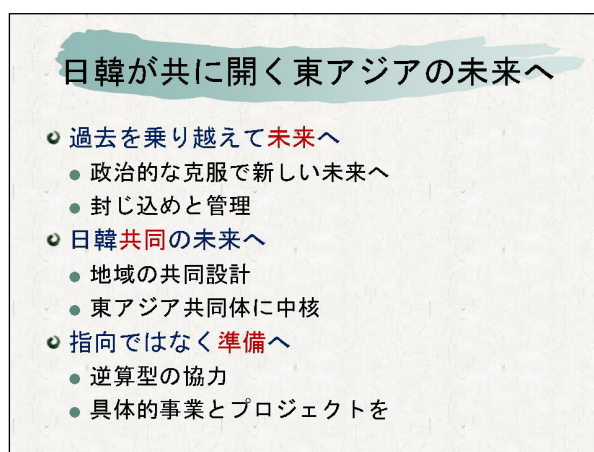


図-18

〈図-18〉 時間の軸でも、過去だけにあまり縛られない関係を作らなければならない。今みんな未来志向と言っていますが、私はその言葉はあまり好きではありません。未来志向と言って過去を直視するというのは見るだけなのです。「ああ、分かった、それが過去なのですね」というだけで本当に乗り越えない。日本語は非常に面白くて、越えるためには乗るべきなのです。ちゃんと乗って、越えて欲しい。直視するだけでは足りない。

未来志向というのは、「ここが大変ですから、ここを見ましょう」ということで指しているだけ

で、それだけだと足りない。未来ビジョンを共有しながら、一緒にそれに向けて準備するところまでいかないといけない。そのような日韓関係を作るべきで、そのような環境はどんどん整っていると私は思います。

東アジアの未来のために、日本がしっかりしたリーダーシップを発揮するためには、日本ももちろんいろいろなことを独自で考えなければいけないのですが、日本と韓国が何ができるかを真剣に考える時期になっている。我々はアメリカのような大国にはなれない。中国に日本と韓国が別々に対応するにも力の限界があります。

日本と韓国はいろいろなことを一緒に考えて、日本の未来、韓国の未来ではなくて、日本と韓国の共通の未来、それを1人で考えるのではなくて、2人で悩みながら共同設計をして、それをどうするかという共同準備の作業をどんどん進める。そのような日韓共同のパートナーシップを私は見たい。そのような時期が訪れることを非常に期待しておりますし、できると思っています。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

〈MEMO〉

■このレポートは本田財団のホームページに掲載されております。

講演録を私的以外に使用される場合は、事前に当財団の許可を得て下さい。

発行所 **財団法人 本田財団**

104-0028 東京都中央区八重洲2-6-20ホンダ八重洲ビル

Tel.03-3274-5125 Fax.03-3274-5103

<http://www.hondafoundation.jp>

発行者 原 田 洋 一